



田中寛一

—日本民族の力を信じた心理学者—

白梅学園短期大学心理学科教授 金子 尚弘

田中寛一博士と、白梅学園の母体である財団法人社会教育協会との関わりは昭和十一年頃から始まる。この頃から社会教育協会が発行する「社会教育新報」の教育時論欄へ、「入学難と試験準備」、「学校教育と職業指導」など、その分野の第一人者であり、東京文理科大学教授であった田中の論文が載るようになった。

その後の昭和十七年、社会教育協会が東京家庭学園を開設したときには、「家庭教育」の講義を担当するようになる。一方、東京家庭学園の創設と同時に発足した附属教育研究

所では、東京文理科大学の名誉教授であった乙竹岩造博士を所長に、助教教授石山脩平、助手の富田竹三郎、副手の神力甚一郎、乙竹の門下生溝上泰子など、文理大の教育学者等が、学校教育、家庭教育、社会教育に関する研究を始めた。また、家庭学園の主事であり研究所の所員でもあった小松愛子(後の白梅学園短大校長 樋口愛子)は、東北帝大を卒業後、文理大の助手となり、昭和十六年頃からは田中が文理大に開設した教育相談部の所員も務めていた。

昭和二十一年、焼土の中に東京家庭学園が再建されたと

き、田中は学監として教育運営に重要な役割を果たすと同時に、「社会心理」、「児童心理」の講義を担当した。教育研究所においては、田中が中心となって牛島義友(東京女子師範学校教授)研究所員とともに「児童の困った遊びに就いての研究」「教育的玩具の研究」や、自作玩具の製造指導を続け、教育玩具講演会や自作玩具指導協議会を開催した。

昭和三十二年、白梅学園短期大学保育科が、新たに学校法人の短期大学として開設されたときには、学園理事を務めるとともに学監となり、保育科の専任教員として「教育心理」を担当した。

その後、昭和三十六年心理技術科(現在は心理学科)の開設時には、「心理学概説」と「教育心理」の授業を受け持った。心理学の専任の教授陣には、東北帝国大学で心理学を大脇義一らに学んだ樋口愛子、クラーク大学で博士号を得た大脇園子(義一の娘)、早稲田の大学院を出たばかりの平井久(後上智大学教授)などがいた。教育課程は、建学の精神であるヒューマニズムと、家庭学園の生活の科学化、社会化、芸術化を実現すべく心理学の基礎と応用を含むものであった。日本職業指導協会理事長でもあった田中の肝いりで、「職業指導」の教員免許も取得できるようにした。心理学科の教材準備室には、今も田中が揃えた職業適性検査器具や身体測定器具がある。機材を使った授業のあるときには、

心理測定器械のメーカーである竹井機器の担当者が常駐したという。短期大学ではあったが四年制大学に負けない教員と教材を揃えて、応用心理学を教授したのである。しかし翌昭和三十七年十一月十二日、心理技術科の最初の卒業生を送ることなく帰らぬ人となった。享年八十歳であった。

田中寛一は、明治十五年(一八八二)一月二十日、岡山県赤坂郡東窪田村(現赤磐市)に、尾崎若松、小登の五番目の子として生まれた。三人の兄、姉と妹に囲まれ、三人の兄たちから勉強や将棋、遊びを教わりながら大柄で活発な四男坊として何不自由なく育った。当時の村の生活は平和ではあったが、住職の説教以外、文化の影響を受けることもなく活気がないものであったという。

石相尋常小学校(現赤磐市立石相小学校)一年生の時、聡明な寛一はいつものように皆より早く計算問題を終わらせて待っていたが、後ろの友だちに答えを教えられ、すつかりせがまれて教えていたところを先生に頭を叩かれ、すつかり学校が嫌になってしまう。両親はほとんどしかることはなく、ましてややなぐると言うことはなかったからである。すつかり学校嫌いになった寛一は、翌日から二、三日、こどもたちの遊び場だった砂川や小溝でフナやドジョウをとって一日を過ごし、皆の帰宅時間に合わせて帰るようにしていた。

しかしすぐに両親が気づき、先生に謝りなさいと優しく諭され、八歳上の姉に付き添われたあやまりに行った。その後は先生も優しくなったが、それでも学校にいやいや通っていた。二年生になり山本という先生が担任となり、ある日、山本先生は寛一を砂川の河原に連れだし優しく諭した。それから寛一は本気で勉強するようになり、優等賞や皆勤賞をもらうようになった。さらに近隣五郡の優良児にも選ばれるようになる。村の裁縫所の先生や生徒が合作で作った当時珍しかった洋服を、村一番のよい子に着せようということになり寛一が選ばれたと、裁縫所の生徒であった姉から聞かされて嬉しかったことを覚えていっているという。両親は褒美に洋服に合わせて靴を買い揃えた。

高等赤坂小学校に進んだ寛一は、さらに聡明さを発揮するようになる。「数学三千題」を、兄の助けを借りて一年間で全部解けるようになった。国語読本はほとんど暗記してしまうくらい勉強したという。ここでも良い先生に恵まれ、課外でもいろいろな指導を受けることが出来た。また勉強ばかりではなく家畜の世話や草刈り、庭の掃除などにも精を出し、労働の爽快さを身につけていくのである。

高等小学校を卒業した当時は、日清戦争の勝利に沸き立ち、身体の丈夫な子は当然のように軍人にとり時代であった。兵学校に入るため中学校の試験準備を始めたが、こ

れを知った両親から、村の誰からも尊敬されている尋常小学校校長の川淵先生のようになって欲しいと懇願され、師範学校に進むことになった。まだ年齢がたらないので准教員養成講習会に入って入学準備をしたという。師範学校卒の教員が不足している時代とはいえ優秀であったのであろう、明治三年から二年間、高陽尋常小学校の准指導を務めた。岡山県師範学校に進んだのは一八歳の時である。師範学校を卒業した明治三六年(一九〇三)、東京高等師範学校本科英語部に進み、ここで研究の師として生涯その恩に感謝し続けることとなる松本亦太郎に出会う。

松本は、アメリカで学位を取り東京帝国大学で「精神物理学」を教授していた元良勇次郎に師事した後、エール大学に留学し、更にライプツヒヒ大学で、世界初の心理学実験室を創設したヴントのもとで学んだ。明治三三年の学期改定で高等師範学校本科の共通科目として「心理学」が開設されるとともに着任したのである。心理学実験室開設の準備も行っていった。

明治四十年、二五歳で東京高師を卒業し山梨県師範学校、岡山女子師範学校での教諭生活を三年半送った。

東京高師卒業を待って、明治四十一年、現在の岡山市西大寺で、電灯事業(中国配電)や軽便鉄道(西大寺軌道)、その他印刷廳や鐘紡の工場を受託するなど大きな事業を営ん

でいた田中森太郎に請われ、森太郎の孫、初音と結婚、田中家の婿養子となった。寛一の才能に惚れ込んだ森太郎は人を立てて、何回も懇請したという。初音も西大寺小町として知られるほど才色兼備の女性であった。

明治四〇年、京都帝国大学文科哲学科に日本初の心理学講座が開設され松本が教授に就任した。日本における近代心理学の幕開けとなる心理学実験室の開設備も始められた。岡山師範学校から東京高師まで同期生であった樋崎淺太郎や一期あとの寺澤巖雄（一人とも後東京文理大教授）らが松本を追って入学する。田中は山梨、岡山の中等教育界の経験を経て明治四十三年に入学し、松本の指導の下、工場労務員の能率実験など精神測定の手法を駆使した実験を精力的に行い優秀な卒業論文を完成した。さらに大正二年九月元良の後を受けて帝国大学に移った松本について東京帝国大学大学院に進んだ。

この頃、京都帝国大学、東京帝国大学で元良、松本に学んだ多くの心理学徒が、その後の日本の心理学の発展を担うことになる。すなわち田中は日本で育つ心理学者の第一世代といえることができる。

田中は大学院で精神的作動に関する実験を行い、「心的作動に関する実験的研究」を纏め、大正七年に大学院を修了した。この学位論文によって大正八年（一九一九）文学博

士の学位を得る。三七歳、当時としては異例の早さであった。大正十年、大学院時代の実験研究を更に進めて「人間工学」を著す。このタイトルは松本によって命名されたが、日本の人間工学研究の緒を開いたのである。

大正期は、心理学が人間活動のあらゆる分野で注目を集めていた。特に大正五、六年以降は、産業界、教育界の諸問題、更にその二つの世界を結ぶ職業適性のような切実な要望が松本の元に寄せられた。心理学の応用、特に精神的作動を中心とした実験心理学の実世間への応用に興味があった松本は積極的に顧問を引き受けた。当然大学院で学ぶ田中の研究にもさまざまな影響を与えた。鐘淵紡績で工場の人員配置の研究中には、当時の社長から採用の誘いがあり迷ったという。その頃西大寺の田中家の事業は傾いており、三人の子どももおり経済的には決して豊かではなかったからである。しかし田中夫人が学問の道が続けることを勧め、結局実験研究に熱中することになる。この頃の研究成果が学位論文や「人間工学」にも反映している。

明治の終わりから大正の初めにかけての第一次世界大戦も、応用心理学的研究に多大な影響を与えた。大正五年から田中は水雷学校の実験心理学的研究を委嘱される。その後海軍部内に実験心理学応用調査会が組織され、松本と田中が顧問となって調査を始めた。その成果をもとに、田中

と増田惟茂(当時東京帝大助手、後助教)が囑託となり、田中は電信符号送受に関わる実験研究を行っている。

また大正八年、当時の東大総長山川健次郎が所長を兼ねていた東大附属航空研究所内に航空心理部が設置されることになり、松本と田中および寺澤が囑託となつてパイロットの適性研究などが行われるようになった。また世界大戦中、パイロットが低圧や酸素不足のため意識に異常を来すことが分かり、その研究が先進諸国で盛んに行われていた。

大学院在学中から、東京高師で実験心理学等の講師を務めていたが学位取得後教授となり、大正十年(一九二一)から二年間、留学のため欧米諸国を廻つた。オックスフォード大学病理学教室の肺機能研究用低圧実験装置を借り、飛行実験のある英米人を含む五、六人の被験者を用いて低圧低酸素での心身作業能率(カード分類、数字の連続計算、文字の記憶、握力、書字の質、反応時間)を測定した。危険な実験であつたが本人も被験者になり三ヶ月間実験を続けた。ある時、助手が操作を誤り気絶してしまう。この時左耳の聴力を失つてしまった。この実験成果は航空研究所に英文で提出され、その貴重なデータは世界中の低圧研究者に広く用いられた。

大正十五年には「日本民族の将来」「教育的測定学」の二著を出版した。「教育測定学」においては、測定および統計

の基本とともに、学業成績、読方、書字、図画、品質、身体検査など、さまざまなテストおよび検査法を紹介している。この時期から実験室で培つた科学的技法を道具として、教育測定分野に進むこととなる。

「日本民族の将来」では諸言において、第一次世界大戦後、世界に広がる自国中心の考え方の根の深さと強さを危惧し、戦火を未然に防ぐ各国の協調を目標とする国際連盟の成立を歓迎しながらも、平和を望む識者の声は民衆を動かす力が弱いことを憂いている。田中は日本民族が世界文化の向上に貢献できるのかを問い、その素質を明らかにすることによつて、日本人に自信を与え、世界文化の向上を担う責任を求めたのである。この中で引用した「日本児童と支那児童の智能」の中で、トロント大学の研究者が、調査したブリチッシュコロンビアで日本児童の智能が最も高いのは、優秀なグループのみが移民しているのであろうと結論づけていることに納得できなかった。欧米を中心に蔓延していた自民族の優生学的な優越思想を否定するとともに、その後の大きな業績となる智能研究を開始することになったのである。

芸術に興味のあつた師の松本は京都帝大教授時代、京都市立の美術工芸学校および絵画専門学校(現京都市立芸術大学)の校長を五年間務めたこともあり、昭和になつて東

京帝大を退官した後、実験心理学的研究よりも、美学の心理学的な研究へと移ってゆく。しかし田中は、ヴント、元良、松本と伝わる実験心理学、民族心理学の道を歩み続ける。精神測定を駆使して心理学の実際生活への適用の道を貫く。民族の研究、個性の研究を、欧米の学説に追従することなく独自の道を切り開き展開していくのである。

昭和三年に出版した「教育的統計法」の緒言に、この書が理論研究ではなく実際教育への適用を目的としていることを協調し、更に昭和十一年に出版した新訂第五版では、新たに序を加え、「日本民族の将来」「教育的測定学」の二著の関係を次のように述べている。「前者によつて教育の根源たる国民の著眼点を正しく且つ高らしめ、後者によつて実際教育の基礎となる教育的事実を精密に且つ正確に把握する方法を会得せしめようとしたのである」。田中にとつて、この二著は、目的と方法の關係に位置づけられているのである。

昭和二年に発会した大日本職業指導協会(現日本進路指導協会)では、四年間にわたつて理事長を務め、個性尊重の考えにもとづく職業指導の普及に尽力した。指導協会の理念目的は、文部省や内務省からの統制によつて徐々に変化することになるが、田中は一貫して職業指導を普及し実績をあげるためには、教育は人のための教育であるという

本義を、教育界全体に自覚させることであると説きつづけた。この時期、職業指導教育の普及のためさまざまな論文を発行するとともに、日本全国を精力的に講演して廻つた。昭和四年発行の「小学校に於ける職業指導」では、職業の科学的、實際的記述、志、早期教育、個性、個人差、智能、身体能力など多岐にわたる要因に言及している。

戦後、昭和二十一年から二十五年までは、職業指導が教育の民主主義化において重要な役割を持つとして再び理事長を務めている。

一方、昭和三年から十一年にかけて「選抜考査法」を始めとして成績基準尺度を作成し、教育測定、評価に直接役立つ科学的用具を提供した。明治、大正時代から、進学者は増え続けており、上級学校数は不足していた。既に準備教育の弊害など、受験に関わるさまざまな問題が生じていたのである。田中はメンタルテストでこそ素質が分かると主張、教育の存在価値を主張する教育学者と論争をしていた。講師を務めていた日本大学予科では大正十四年度から入試を廃してメンタルテストを実施、試験委員として練習の方法や効果、能率を測定していた。また、府立五中でもテスト改革に取り組んだ。これらの研究は、教育評価を科学的なものにする先駆的、独創的な試みであった。

昭和十年、田中は東京文理科大学に教育相談部を開設し

部長として、多くの教育心理学、児童心理学の実践者、研究者を育てることになる。ここでの実践および朝日新聞紙上での教育相談事例をもとに、昭和一四年、「愛児の教育相談」、昭和一七年には「愛児の導き方」を出版する。後者では個性や民主的な考えが否定された国民学校における教育の変化についても相談に応じている。

昭和十一年（一九三〇）には「田中B式知能検査」を完成させた。B式とは言語の影響を排除するため、数字、図形、符号から成り立つ検査であり、諸民族の知能を比較することが出来るものである。このテストを用いて昭和十一年から十四年にかけて、台湾、朝鮮、中国を廻り「東洋諸民族の知能に関する研究」を東京文理科大学の紀要に連載する。さらに昭和十二年から一三年にかけて、アメリカのホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルスにおいて児童の智能調査を行い、昭和十六年「アメリカ三都市における諸民族の知能に関する研究」を文理大紀要に発表するとともに、「日本の人的資源」を刊行するのである。智能をはじめ身長、座高、肺活量、気質精神、出生、死亡といった広範なデータをもとに、日本民族の優秀性、特異性を明らかにし、「日本民族の遠大な理想の実現は不可能ではない」と、日本民族の将来と同様、日本民族の優秀性を明らかにしつつ、その責務は高い文明を築くことであると説くのである。

田中寛一は常に教育の研究者であるとともに、教育に関わる事業の実践者でもあった。

師範学校以外での最初の教育経験は、大正五年、東京帝大の大学院生として精神作動の研究をしている頃である。ベラ・アルウィン（有院遍良）が、玉成保姆養成所（現玉成保育専門学校）と幼稚園を開設した時、「最良の教育は最良の教師にあり」というアルウィンの考えのもと、松本が「心理学」、田中が「児童心理」を担当することとなった。十数名の生徒は語りかけるように、あるいは真面目な顔で冗談を交える講義に引き込まれるように聞き入ったという。

昭和三年から三年間は、東京高師附属中学の主事を務めた。「無駄口はきくな」「口は一文字に結べ」と言われた思い出を語る卒業生は、威厳と一人ひとりに気を配る温か味のある姿を忘れないという。

更に昭和九年からは、自立した女性を育成するために明治四十二年設立された帝国女子専門学校（現相模女子大学）の学監を、二十年の戦災によって閉鎖されるまで務めた。

戦後の一時期には短期間、玉川大学の学長を務めたが、昭和四年玉川学園が誕生した際には創立者小原国芳に請われて初代学園長も引き受けた。日本大学では、英語を担当する兼任講師時代から心理学研究室、実験室の開設に尽力し、東京文理科大学定年後は教授となった。

戦後の厳しい状況でも、東京高師や文理科大学等の同窓会組織「茗溪会」理事長を務め、組織統合を進めるなど、常にまとめ役を引き受けるのである。

「田中寛一が、自らの信条を『志は正高に、行は精確に』と言い表しているように、モンテッソーリやフレーベルの教育を日本で実現しようとしたベラ・アルウインの玉成保母養成所、明治期から女子の高等教育を目指した帝国女子専門学校、青年子女の社会教育の充実を図ってきた社会教育協会と、いずれも高い理想を追って地道に努力している姿に共感し「金儲けをしない学校だから努力するのだ」と惜しまぬ協力をしてきたのである。

小松謙助(社会教育協会創設者)は、田中寛一を「重厚で、しかし窮屈な感じはみじんもない。いつも微笑を湛えて、物静かに諄々と語るところ、聴く人の耳を自然に傾けさせる魅力がある」と評している。この人物評は多くの人が共有するところであった。東京高師時代にテニス部のキャプテンとして、小泉信三の慶応や、早稲田、東京商高と戦った経歴を持つ頑健な体軀は何ものにも動じず、それでいて柔和で優しい物の言いようが、独特の風格を感じさせたという。

昭和二十二年、「田中ビネー式智能検査法」を刊行する、これは昭和十三年から五年間を掛けて標準化したものであ

ったが、戦局の厳しい時期には刊行できなかったのである。田中寛一は、昭和二十三年、茂木茂吉(元日本文化科学社々長)らとともに日本教材研究所を作り、新しいテストの標準化や講習会などを陣頭指揮した。田中教育研究所は昭和三十四年財団法人となつて各種のテストや出版物を作成販売するとともに講習会を開き、今も田中寛一の遺志を継いで各種のテストを研究開発し、心理測定の普及を図っていることは良く知られている。

寛一は、日本全国を飛び回る仕事の合間にも、一六歳上の長兄尾崎巳之吉を度々訪れている。巳之吉の末娘、戸田金子はその当目を良く覚えていた。遅くなつても暗い夜道をまわしよけにと、靴の上に靴下を履いて近所廻りを済ませ、好物の赤飯を食べ、遅くまで地酒を飲みながら兄と弟の会話は尽きなかったという。京都、東京での学生時代は兄も心配であつたであろうが、東京で活躍する頃には、金子は玉成保母養成所に入學し叔父の自宅から通つた。仕事に出かけるときには、玄関先でフロックコートに掛け方を教え、週末、訪問客を避けてテニスコートのある鎌倉の別荘に籠もるときには、竈の火の付け方も教えてくれたという。

田中寛一の日本民族への思いには、両親、兄弟をはじめ、

多くの人々の愛情、ふるさとが培った人間への信頼が根底にある。石相小学校にある顕彰碑には、小学校での学校嫌いを優しく論してくれた山本先生の息子、書家の山本蕃の文字が刻まれている。生涯にわたって現役として、研究と教育、また個人の生活で発揮した忠実な仕事ぶり、人の敬慕を集める人柄は、郷土の人々の温かい愛情によって育まれたのである。

西大寺に今も残る田中家の屋敷は、大正の半ば頃から野村商店金岡家が所有している。白壁の蔵の屋根の鬼瓦には、今も丸の中に田の文字が見える。毎年手が入れられ昔のままの美しさを保っている。西大寺の人々が田中寛一に抱く敬愛の気持ちが伝わり心が温まる思いであった。

田中寛一の姪、戸田金子さん美恵さん親子、親戚の方々、赤磐市山陽郷土資料館から資料の提供とお話しを伺いました。また田中教育研究所からは先生の肖像写真と資料を提供して頂きました。感謝いたします。

【参考文献】

- Intelligence of Chinese and Japanese children. Sandiford, P.; Kerr, R.
Journal of Educational Psychology. Vol 17(6), 1926
- 田中寛一『日本民族の将来』培風館、1926年
- 田中寛一『教育的測定学』松邑三松堂、1926年
- 田中寛一『小学校に於ける職業指導』藤井書店、1929年
- 田中寛一『教育的統計法』改訂5版、松邑三松堂、1937年
- 田中寛一『日本の人的資源』蜚雪書院、1941年
- 田中寛一『良い子の育て方「児童の性格教育」』社会教育協会〈婦人講座 第140篇〉、1941年
- 伊藤祐時『田中博士とわが国学校職業指導の発達』田中寛一博士古稀記念論文集・教育心理学の諸問題、日本文化科学社、1952年
- 田中寛一『ベスタロッチ』日本文化科学社、1954年
- 田中寛一『〈随想〉小学校時代の思い出』児童心理、金子書房、1958年
- 『記念誌』田中寛一先生感謝の会、1960年
- 小松謙助『壽福二題 田中寛一博士と吉岡弥生女史』国民610号、社会教育協会、1962年
- 『田中寛一先生記念誌』田中教育研究所、1963年
- 『日本の心理学』日本の心理学刊行委員会編、日本文化科学社、1982年